

竹久夢二と「伊勢物語」

山 岡 萬 謙

倉敷芸術科学大学教養学部

(1995年9月30日 受理)

はじめに

「伊勢物語」は「大和物語」と併称される歌物語で、第125段（和歌209首を含む）からなる平安前期の物語である。この「伊勢物語」が古来、多くの人びとに愛読されて来たことは周知の事実である。このことは諸文献の記事や、数多くの伝本が存在することによっても明らかである。「源氏物語」をはじめ多くの歌論書、詠歌の参考書、謡曲「井筒」、浮世草子「好色一代男」、仮名草子「仁勢物語」など、文学史上に与えた影響は大きい。古くから「伊勢物語」は「業平の物語」とも言われ、文学のみならず絵画・工芸の世界への影響も見逃してはならない。「伊勢物語」に取材した絵画の名作として「伊勢物語絵巻」「嵯峨本伊勢物語」「土佐光起筆業平歌意図」「宗達筆伊勢物語」「光琳筆伊勢物語」などが有名である。

さて、今回入手した「新訳絵入伊勢物語」は、大正6年5月、阿蘭陀書房が出版したもので、吉井勇訳、竹久夢二画となっている。この作品には竹久夢二の挿絵21葉（色刷り木版画5葉）が見られる。これら挿絵の重要性は、夢二の作品の中では稀な古典からの取材という点にある。もちろん、夢二は画壇において無所属・無籍者でありながら、日本画・油彩画・ペン画・版画の名手であった。そして、大正ロマンの華々しい旗手であったことはいままでもない。あの夢二式美人画の独特な、傷つきやすい寂しげで繊細な感性の美女は、すべて近代社会的な背景をもった風俗画であった。したがって、夢二の古典に対する視点を研究するのに適した資料は極めて少ない。そういう点での資料的な価値として、この「新訳絵入伊勢物語」の挿絵に注目したいのである。夢二の古典に対する視点としての資料は、彼の「絵入歌集」や「絵入歌集暮笛」などからも見られ、これらの取材範囲は「万葉集」「和泉式部集」「千載集」「新古今和歌集」などである。しかし、この「絵入歌集」「絵入歌集暮笛」の両作品に見られる挿絵からは、ほとんど夢二の古典に対する姿勢は伺われない。わずかに、選択された和歌の傾向によってのみそれが推定されるのである。したがって「新訳絵入伊勢物語」の挿絵と「伊勢物語」の原典を対照する意義を強調したいのである。

竹久夢二は、わが郷土が誇る文筆家であり、画家であった。大正8年8月、新潮社出版の「夢のふるさと」の中の「宵待草」と、大正6年4月、雲泉堂書店出版の「春の鳥」の

中の「音戸小唄」が最も人口に膾炙された詩である。一方、彼の美人画は、腺病質で憂いを含んだ、いわゆる夢二式美人画として大正時代を風靡したのみか、現代なお人気の高い芸術作品なのである。夢二没後約60年になる今日、彼の膨大な文献のうち、古典文学（特に「伊勢物語」）への取り組み姿勢を研究してみる。研究対象の「新訳絵入伊勢物語」は、吉井勇が、和歌以外の文章を口語訳したものが本文となっている。そして、目的とする、竹久夢二が描いた21葉の挿絵が組み込まれている。そのうちの5葉が色刷りの木版画である。そして、他の16葉は普通の印刷による挿絵である。なお、この21葉の挿絵は、男性8葉（色刷り1葉）、女性9葉（色刷り3葉）、男女4葉（色刷り1葉）となっている。従って、これらの分類によって論述を試みる。以下、論述中にある古文の引用は「岩波古典大系」によった。

「新訳絵入伊勢物語」の中の色刷り木版画の5葉

1

5葉の色刷り木版画は、すべて傑出した作品であって、それぞれ第9段「都鳥」、第23段「筒井筒」、第58段「長岡の女」、第76段「春宮の御息所」、第110段「魂むすび」の内容を絵画化した作品である。これら色刷りの顔料は岩絵具を用いた手刷りで、あざやかな色調を湛えている。夢二が「伊勢物語」の挿絵を描いた理由の第一は、「伊勢物語」の浪漫性だと考えられる。「昔男」を中心として、その周囲に出没する女性群像が織り成す悲喜劇は、まさに夢二のロマンをかき立てるものであったろう。また、第二の理由は、「伊勢物語」が歌物語であって、和歌を中心とした短編125段で、題材選択が豊富で自由であるという点であろう。さて、こうした点を踏まえてみれば、夢二が最も関心を寄せた5つの小話（和歌を含む）こそ、まず色刷りの5葉であったと考えられるのである。その5葉の中から白眉ともいえるのは、第110段「魂むすび」の挿絵であろう。この段の原文は次の通りである。

むかし、をとこ、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「こよひ夢になん見え給ひつる」といへりければ、をとこ、

思ひあまり出でにし魂のあるならん夜ふかく見えば魂むすびせよ（110段）

「みそかに通ふ女」が「夢になん見え給ひつる男」を慕う、いわゆる「しのぶ恋」は夢二の最も得意とする構図に相当するものである。「までどくらせどこぬひと」を待つ姿を「伊勢物語」の世界に見事に実現させた絵が、この作品なのである。崩れかかった築泥を背景にして、桂姿の垂髪の女性が幽愁にとざされた面持ちで行んでいる姿なのである。あたりには宵が迫っている。庭に出て男を待っているこの姿こそ、夢二の執筆意欲をかき立てた結果から生まれた作品ではなかったろうか。夢二の作品の中で、このような系統の作品として、代表的なものを書き出してみた。「春まつ人」「灯ともし頃」「君ゆえに」「春」「稲荷詣で」「白夜」「日本之雨」「野火」などがそれである。この作品群は、ほとんど「宵待草」

に属する女性を描いたものである。その中で、古典から取材した挿絵という点でこの「魂むすび」が価値づけられると思うのである。

2

「魂むすび」の挿絵と比肩しているのが「筒井筒」の挿絵である。これは第23段の和歌を中心とした色刷り木版画の1葉である。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、
大人になりければ、をとこも女も恥ぢかはしてありけれど、をとこはこの女
をこそ得めと思ふ。女はこのをとこをと思ひつつ、親のあはすれども聞かでな
んありける。さて、この隣のをとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひひて、つひに本意のごとくあひにけり。

(23段)

この「幼なじみの恋」の小話は、謡曲「井筒」、雑俳「柳多留」、浄瑠璃「義経千本桜」、樋口一葉、室生犀星などに影響を与えている。「幼い男女の遊びなかま」、あるいは「幼なじみの恋」ほどロマンチックなものはない。古今東西、この感傷性を帯びた純粋な恋は、すべての人の心を引きつける普遍性がある。多くの童謡をも作った夢二にとって、この「幼なじみの恋」は、強い吸引力をもったものに違いなかったと思われる。この色刷り挿絵には、夢二の作品に多く見られる退廃美もなければ虚無感もない。また、腺病質で細長い首や手足の嫋々とした美人でもなければ、黒く大きな瞳の、細面で柳腰の麗人でもない。ただ、あどけない少年少女のふたりが、円形の井戸枠に手をおいて、井戸の中をのぞいている姿を描いているのである。絵の左下には釣瓶が置かれ、そこから左上にかけて桐の木が男女の頭上に葉を茂らせ、右上空に燕が飛んで、右下には雑草が描かれている。服装は男が紺色の直垂、女が煉瓦色の小袖をつけている。何よりも、ふたりの男女の顔が初々しく無邪気なのがよい。この段の「親のあはすれども聞かでなんありける」という恋の障害を越え、強い意志で結ばれたふたりへの共感と祝福の気持ちが漂った作品とっていい。男女の贈答歌は「たけくらべ」をした子どもの遊び場でもあった井戸枠での思い出を中心に詠っている。夢二は短歌をよくし、すぐれた作品を多く残している。その彼が愛好した贈答歌のひとつがこの作品ではなかったろうか。夢二の絵の中から、男女を描いた作品を探してみると極めて少い。大半が女性ひとりを描いた作品である。男女ふたりを描いた作品といえば「みちゆき」「旅」「化粧台」「ネクタイ」「歯をみがく子供」「遠山に寄す」「青春譜」などが代表作であるにすぎない。その中で、強いて「筒井筒」の挿絵と共通性をもった作品といえば、「遠山に寄す」「歯をみがく子供」「青春譜」の3つの作品を挙げることができようか。これらの作品を貫いているものは、清潔で健康な情景という点である。いわ

ゆる美人画家といわれた夢二の違った一面をもった作品だといえよう。

3

「筒井筒」の段と同じように後世に大きな影響を与えたのが、第9段の「都鳥」の小話である。

さるをりしも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水のうへに遊びつ
つ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これ
なん都鳥」といふをききて、

名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやしやと
とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。 (9段)

「伊勢物語」の中で、いわゆる「東下り」といわれ、謡曲「隅田川」に大きな影響を与えた作品の原文である。この文章と和歌には激しい望郷の念がこめられている。「都鳥」という名を聞き、思わず都恋しの和歌が口にのぼり、一同が泣くのである。夢二は、この望郷の念を引き出す手段として、画面一杯に群青でもって「すみだ河」の水面を描写し、ただ一羽の純白な「都鳥」と一艘の小舟とを描くという方法をとっている。舟の中には、狩衣を着た「昔男」と水千姿の「供人」ひとりがすわっていて、「渡守」が舟を漕いでいるといった構図である。当時、東国といえ、はるかな異郷の地である。いやがうえにも都恋しの念が湧いてくる。自ら貴族社会の束縛を断ち切った「昔男」は、自由な人間らしい生き方を求めていたのである。それは、まるで夢二自身の生き方ではなかったのか。「昔男」の性格、心情に色濃い浪漫の影があるが、それは夢二と酷似しているといってもよからう。特に、遠い旅路にあって都に残した妻を思う哀感の漂う和歌は、夢二の挿絵によって生気を甦らせてくれるはずである。夢二は男をあまり好まない。男はほとんど描かない。代表作の中にはわずかに「春江垂釣」と「花とおらんだ人」の2点しか見当たらない。美人画家と言われる所以であろうが、この「昔男」が舟中で沈思している姿は、まことにすぐれた男性像の作品といえよう。「昔男」は夢二と同じように社会正義感と反権力意識をもっていた。そして、過去に栄え現在に滅びゆくものへの郷愁が強かったのである。

4

色刷りの木版画5葉の中で、残りの2葉はそれぞれ、女性ひとりずつ描いた作品である。第58段「落穂ひろひ」と第76段「二条の後」のそれぞれの本文を示しておく。

むかし、心つきて色好みなるとこ、長岡といふ所に家つくりて居りけり。
そこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、田刈らんとて、
このをとこのあるを見て、「いみじのすき者のしわざや」とて、集りて入り来にければ、
このをとこ、逃げて奥にかくれにければ、女、

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけんひとのおとづれもせぬ (58段)

昔、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人びとの禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山もけふこそは神世のことも思ひ出づらめ

とて、心にもかなしと思ひけん、いかが思ひけん、知らずかし。(76段)

ここに描かれている女性は、それぞれ小袖姿に描かれている。前者(58段)は丘の上に立っている女性で、市女笠を被っている。後方わずかに牛車らしいものの一部が見え、青天に白雲がかかり、小鳥が飛んでいる。丘の草色と空の群青との対照があざやかで、女性の小袖の山吹色が浮き立って見える。片手を笠にかけ利口そうな顔をして、画面の左側を見つめている。この第58段「落穂ひろひ」の女性は、積極的に男性に迫り、家の奥に逃げこんで出て来ない男をからかったの作品ということになっている。それかあらぬか、あどけない明るい女性を描きあげ、天真爛漫な雰囲気にも満ちた作品といえよう。ここには夢二のもつ繊細な女性像タッチは微塵も見られない。やはり原文を十分に研究し尽して影像化したものであろう。後者(76段)は、二条の后が大原野参詣の際に在原業平が詠んだ歌を中心とした小話が絵画化されている。いうまでもなく「伊勢物語」は業平の歌、とりわけ恋の歌を軸にして編まれている。とすれば、ここも業平が二条の后との以前の契りを結んだことを思い出しての作である。その美しい二条の后は、大原野神社の玉垣に手をかけ、松の木を背景にして、誰かに話しかけているような構図で描かれている。おそらくその視線をたどれば、歌を奉った老人(業平)を発見することができるにちがいない。この挿入絵全体の色彩は、明るく淡い色調で、女性の顔(二条の后)も瓜実顔で無邪気な清潔感そのものである。やはり、描く対象が対象だけに夢二も工夫を重ねて描いたものであろう。ここでの二条の后は、自分の左前方(絵では向かって右前方)を向いている。およそ夢二の絵の女性は、大半が自分の右前方(絵では向かって左前方)を向いている。だから、この二条の後の絵は、夢二の作品としては珍しいといえる。これに類する夢二の作品としては「凧揚げ」「逢状」「三味線堀」「北方の冬」「日本の雨」「娘」「百合の花を持つ少女」「秩父機織り」「表衣の女」「白夜」「暮春」「産衣」「灯ともし頃」「秋の丘」「稲荷山」「からふねや」「紅燈夜話」「君ゆえに」「待つ人」などがある。

「新訳絵入伊勢物語」の中の男性だけの挿絵

1

夢二が男性だけを描いた代表作はほとんどなく、わずかに「花とおらんだ人」という作品が見当るだけといってよい。しかし、この「新訳絵入伊勢物語」には、色刷り木版画1葉、白黒印刷の挿絵7葉、計8葉が見られる。以下、白黒印刷の挿絵7葉について述べてみよう。この7葉は、第1段「うひかうぶり」、第4段「月やあらぬ」、第9段「東下り」、

第16段「紀有常」、第45段「ゆく螢」、第67段「逍遙」、第103段「寝ぬる夜の夢」以上である。このうち、「伊勢物語」の原文を忠実に映像化したものは第4段と第45段とである。

又の年のむ月に、うめの花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、みて見れど去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
とよみて、夜のほのほの明るるに、泣く泣く帰りにけり。 (4段)

むかし、をとこありけり。人のむすめのかしづく、いかでこのをとこに物いはむと思ひけり。うち出でむことかたくやありけむ、物病みになりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親ききつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど死にければ、つれづれとこもり居りけり。時は水無月のつごもり、いと暑きころをひに、夜ゐは遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。このをとこ、見臥せりて、

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ
暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ悲しき (45段)

以上の第4段と第45段は、ともに相手の女性を失った悲しみの「昔男」が描かれている。前者(4段)の「昔男」は左上方(向かって右上方)の月を眺め、後者(45段)の「昔男」は右上方(向かって左上方)の空を眺めている。いずれも二度と帰って来ない女性(前者は入内で、後者は死去)を偲んでいる姿である。夢二はこの二点を描くにあたって、あの土佐光起筆の「業平歌意図」が念頭にあったのではなかろうか。土佐派の細密画とは違って、軽いタッチの素描ではあるが、いわゆる引目鉤鼻と通称される無表情な人物像と鳥瞰図が構図法の上に生かされている。こうして夢二は、少くともこの二点では伝統の画面構成法に従いながら、大胆な省略や個性的装飾化により、原文のもつ情趣を造型しようとしている。両作品ともに純情一途な男性の行動と心情が表現されている。縁側に座り込んで、遂げられない恋の苦悩ゆえに中天の月を見つめる姿は、悲恋の姿を形象化しているのである。背景としては、第4段では梅、第45段では螢がそれぞれ画面の上で生きているのはいうまでもない。

2

第9段「東下り」、第103段「寝ぬる夜の夢」も無難に「昔男」の姿を描いている。それぞれの原文を示してみよう。

富士の山をを見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、
なりは塩尻のやうになんありける。 (9段)

むかしをとこありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。
深草のみかどになむ仕うまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちのつ
かひ給ひける人をあひいへりけり。さて

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな
となんよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。 (103段)

この二つの段のうち、第9段「東下り」は、すでに「東下り（宗達筆伊勢物語）」「業平東下り図（尾形光琳筆）」などで知られている。これら大家の絵はあくまでも草麗な色彩と、大胆な様式化によって生み出された豊かな表現で、日本画の極致を示すものといつてよい。画面の左前方に富士が聳え、右下には馬上の「昔男」と3人の友人、1人の供人が、その富士を見上げている図である。これに対して夢二の「東下り」の絵は、馬上の「昔男」と供人のふたりだけで、友人は描かれていない。構図は画面の下方に人物が描かれ、上方に大きな富士が描かれている。雪が降り積っていて、「鹿の子まだら」で「比叡山を二十ばかり重ねあげ」たような富士山が印象的である。ただし、この絵はあくまで白黒印刷の挿絵であるから、草麗な感じはないが、夢二らしい現代的な絵である。この絵は、前述した第4段「月やあらぬ」第45段「ゆく螢」が伝統的古典的な構図であるのにして、個性的現代的な構図である。その点については、第103段「寝ぬる夜の夢」もこの絵と同様の傾向をもっている。第103段では「昔男」の歌を「きたなげさよ」と卑下した詞で評している。「あくことのない愛欲追求の心」を詠じた点が夢二の創作意欲をかき立てたものと思われる。「昔男」の女性に対する複雑で貪欲な愛情が詠まれている。その心情が如実に絵画化されている。女性と一夜を共にしたことをもの足りなく思い、家に帰って夢ではっきりさせようと思うが、ますますぼんやりしてももの足りなく思う。そういう気持ちで、「昔男」が蚊帳の中から半身を出して灯台に向かって顔にはっきり宿っている。そういう、画面一杯に描かれた悩める男性像がすばらしいのである。この段の挿絵も夢二にとって会心の作ではなかろうか。

3

第1段「うひかうぶり」第16段「紀有常」第67段「逍遙」の3つの挿絵作品については、特にすぐれているとは思われないものである。第1段の「うひかうぶり」は、情熱的な男性描写ではなく、男が神社の鳥居を背景にした丘の上に腰掛けている絵である。これでは、全く本文を絵画化したものとはいえないのである。ただ、「春日の里」の雰囲気はなんとか描き出しているとも思える。その挿絵の内容は次のように表現されている。

むかし、をとこ、うひかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、

狩に往にけり・その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。このをとこ、
かいまみてけり。 (1段)

第16段「紀有常」の小話は和歌の部分の内容を挿絵にしている。その和歌とは次の2首である。

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしとたてまつりけれ
よろこびにたへで、又、
秋や来る露やまがふと思ふまであるは涙の降るにぞありける (16段)

「むかし、紀の有常といふ人ありけり。」「心うつくしくあてはかなることを好みて、」という風流人としての人柄は、夢二の好む人物像である。親友から着物はもちろん、夜具までも贈ってもらった有常の感謝の気持ちが込められた和歌である。友情に対して涙にurenながら顔を片手で覆っている狩衣姿の有常を、素描の形でうまく描いている。挿絵はあくまでも副であって、本文の文章（ここでは口語訳）が主であることを思えば、肯ける作品ということができるとであろう。

第67段「逍遙」は「むかし、をとこ、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ二月ばかりにいきけり。」から始まっている。

あしたより曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木のすゑに降りたり。それを見
て、かの行く人のなかに、ただひとりよみける。
きのふけふ雲のたちまひかくろふは花の林をうしとなりけり (67段)

夢二は「昔男」を僧侶の姿で描いて、面白く変身させている。「新訳絵入伊勢物語」には、前述したように夢二の挿絵が21葉ある。それらは、いくら挿絵といっても、個々ばらばらではない。何らかの形で関連性があるはずである。従って、「伊勢物語」に出てくる主人公「昔男」は、それぞれ独立していて、物語全体にわたって、いわゆる「みやび」で統一されていなければならないのである。その点でこの段の「昔男」を行脚僧としたのは肯定できる。また、画面の背景となっている生駒山がまことにユニークに描かれ「雪いと白う木のすゑに降りたり。」が活かされている。それより何より、僧（「昔男」）の顔がいい。何ともいえぬ憂愁を含み、視線を足下に落しているのが、本文を引き立てているのである。

以上、夢二の挿絵に見られる男性だけの画像について、「伊勢物語」の本文と対照させて考察してみた。近代以前の「伊勢物語」に取材した絵は、例外なく華麗な色彩の細密画であった。しかし、夢二の「伊勢物語」の挿絵は、それが挿絵であるという点で、伝統的なこれらの物語絵とは趣を異にしている。生きた筆遣い、無駄を省いた筆法、線と線が織りなす運筆の妙味、単色の中の濃淡による立体感などは、いかにも近代的手法である。ただ、残念なのは夢二の男性画が生氣にかけ欠けるということである。女性画は身体全体で表現

している心情や思念があるが、男性画にはそれが乏しいのである。考えてみると「伊勢物語」は「昔男」の「みやび」を描いた作品なのである。夢二には、その点での意織がもう少しあってもよかったのではあるまいか。

「新訳絵入伊勢物語」の中の女性だけの挿絵

1

「新訳絵入伊勢物語」には女性を描いた挿絵が9葉ある。そのうちの3葉は色刷り木版画で、残りの6葉が白黒印刷の挿絵である。この6葉の女性画は、すべて力作であって、鑑賞者を楽しませてくれる。その女性画は、第27段「たらひのかげ」、第40段「異しうはあらぬ女」、第71段「すきごとひける女」、第81段「しほがま」、第90段「つれなき人」、第119段「形見」の6葉である。これらを2つに分類して、3段ずつで解説してみよう。第27段、第40段、第71段、それぞれの原典の主要部分は、

昔、をとこ、女のもとに一夜いきて、又もいかずなりにければ、女の、手洗ふ所に貫簀をうち遣りて、たらひのかげに見えけるを、みずから

我ばかり物思ふ人は又もあらじと思へば水の下にもありけり

とよむを、来ざりけるをとこ立ちききて、

水口に我や見ゆらんかはづさへ水の下にて諸声になく (27段)

むかし、わかきをとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへおひやらむとす。さこそいへ、まだおひやらす。人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とどむるいきほひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。 (40段)

昔、をとこ、伊勢の齋宮に、内の御使にてまるれりければ、かの宮にすきごとひける女、わたくしごとにて、

ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに

をとこ、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに (71段)

とある。

第27段は女性の和歌に従って挿絵としている。「私ほどもの思いに沈んでいる人はいないと思っていたのに、なんと水の下にももうひとりいたことだよ。」という歌の通りに忠実に描いているといえよう。線描が中心であるが、桂姿の女性が、たらいに写った自分の顔をのぞき込んでいる。驚きの表情と、なまめかしく感じられる姿態とは、さすがに夢二だけあってすばらしい表現効力を示している。一夜きりで二度と通って来なくなった男を恨み、

かつ恋しく思っている心情が、簡略化された線上に生きて乗りかかっているようである。

第40段は「異しうはあらぬ女」を描いている。この女性は、男性の家に召使いとして奉公していたものと思われる。それを踏まえて、夢二は「水汲み女」の姿を挿絵としている。この段も命をかけた激しい恋に絶命しかけた「わかきをとこ」が主人公の小話であり彼の和歌も述べてある。しかし、描かれているのは主人公の「わかきをとこ」ではなく、召使いの女性である。また、この女性が何ともいえない愛らしい顔立なのである。小袖らしい着物を着て、両端に水桶を吊り下げた天秤棒を担いだ少女の下方を向いている顔の可憐さ。この女性ゆえに、身分の差も両親の反対も越えて、熾烈な恋に殉じようとした男性なのである。女性を描かせれば絶品といわれた夢二ならではの作品である。

第71段は前段と違って、まことに好色で情熱的な女性が登場してくる。それにふさわしい挿絵でなければならない。画面左上に大きな鳥居があり、右上まで続いた斎垣（神域と俗界とをへだてる垣）が見える。その前方に大きな美女が立っているのである。その女性のあでやかなさまは目を見張るばかりである。派出な模様の小桂をまとい、右手で口許を押えて、物言いたげな風情の絵である。まことに原典を凌駕するようで、「神の斎垣も越えて都のあなたに逢いたい」と全身で訴えているのである。

2

さて、後半の3段は前述したように、第81段、第90段、第119段の女性画であって、原典の次の文章に準拠して描かれている。

そこにありけるかたみおきな、いたじきのしたにはひありきて、人にみなよませはててよめる。

しほがまにいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここに寄らなん
となむよみけるは。陸奥の国にいきたりけるに、あやしきおもしろき所どころ
多かりけり。 (81段)

むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけん、「さらば、明日物越しにても」といへりけるを、限りなくうれしく、又うたがはしかりければ、おもしろかりける桜につけて、

桜花けふこそかくもにほふともあなたのみがた明日の夜のこと
といふ心ばへもあるべし。 (90段)

むかし、女の、あだなるをとこの形見とておきたる物どもを見て、
形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを (119段)

第81段は有名な源融の「河原院」での酒宴が舞台となっている。「しほがまに」の和歌は「かたみおきな（実は業平）」が詠じたものである。「河原院」の池が奥州塩釜の浦の形を

模したものであった。その池のすばらしさを塩釜の浦に見立てた和歌である。この和歌では「釣する舟」の点景を熱望しているが、夢二は女性を描き込んでいる。もちろん夢二の挿絵は、原文に従って、塩釜の浦らしい海岸は描いている。海面に帆船が3艘ほど浮かび、その上を鷗が2羽飛んでいる。そして、それら塩釜の浦を背景に、唐衣姿の女性が扇を持った右手で顔を隠しながら佇立しているのである。読者は思いもかけない挿絵に違和感を覚えるにちがいない。しかし、よく見ているうちに、夢二の「みやび」に対する創作意識を感じざるをえない。やはり、ここには女性と海岸の鳥瞰図がふさわしいのである。

第90段は、「昔男」の和歌から想像される相手の女性像を描いている。相手の女性は冷淡で気位が高い女性である。この女性がやっと逢うことを約束してくれた。しかし、やはり、あてにしてよいものかどうか危惧されてならないのである。そんな「昔男」の不安な心を詠んだ和歌を踏まえ、すばらしい美女を影像化しているのである。兵の上に立つ女性の全身が画面一杯に大きく描かれている。そして、小桂姿の女性の全身に桜の花弁が散りかかっている。そのみではない。女性の足下にも頭上にも爛漫たる桜の花びらが漂っているのである。その女性の顔は、まさに夢二式の美人画で、高慢ささえ感じさせるのである。夢二は「昔男」の和歌の「桜花」の「たのみがたさ」を、女性の全身にふりかけて創作したものとといえるのではないか。

第119段の恋は、浮気な男性であるが思い切れないせつない女心を詠じている和歌である。これさえなければ男を忘れられるのという「形見」の品を、夢二は男性の冠として描いている。挿絵は部屋の中央に顔を隠した女性を座らせている。唐衣を着た女性の前には和琴が置かれている。その和琴の上に、問題の「形見」である冠が乗せられているのである。あの浮気な男性に、心を込めて弾いて聞かせたであろう和琴、忘れられない男が着していた冠、これは夢二の創作意識の卓越さを示すものに外ならない。古典の文字表現だけでは、あたりの雰囲気を描けないことをこの挿絵は見事に映像表現したものだと思う。

「新訳絵入伊勢物語」の中の男女の挿絵

1

前述したように、「新訳絵入伊勢物語」には男女が描かれた挿絵が4葉（色刷り木版画1葉）ある。従って、すでに色刷り（第22段「筒井筒」）1葉は解説しているので、残りの3葉について論述してみよう。3葉とは、第6段「芥川」、第37段「色好みなる女」、第95段「天の河」である。それぞれ原文の主要部分を述べてみる。

むかし、をとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上にをきたりける露を、「かれは何ぞ」となんをとこに問ひける。

……略

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを (6段)

昔、をとこ、色好みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思ひけん、
我ならで下紐とくなあさがほの夕影またぬ花にはありとも
返し、

二人してむすびし紐をひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思ふ(37段)

むかし、二条の後につかうまつるをとこありけり。女の仕うまつるを常に見
かはして、よばひわたりけり。「いかで物越しに対面して、おぼつかなく思ひつ
めたること、すこしはるかさん」といひければ、女、いとしのびて、物越しに
逢ひにけり。物語などして、をとこ、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ
この歌にめでてあひにけり。 (95段)

第6段の挿絵は、塗りつぶした漆黒の闇の中に、浮かぶように白色の柳・草・露・芥川などが配され、中心に桂姿の女性を背負って先を急ぐ狩衣姿の男性の姿、という作品である。有名な深窓の姫君を盗んで逃げていくこの絵には、「嵯峨本伊勢物語」にも類似した作品がある。しかし、夢二の作品は夜中の趣をよく出し、男女の表情を雰囲気合ったように描いている点が傑出している。少女とも思えるあどけないその女性の顔には、男を信頼しきった心情がよく表れている。あわたましい道行であるようすが、男女両人の全体から感じられ、背景の闇が不気味で、原典をこなした挿絵である。前述したように、夢二が描いている男女の絵は、代表作として数点しかない。それらは皆、清潔で健康なものでもある。この第6段の男女の絵も例外ではない。しかし、第37段と第95段はそれらとは違う。情熱的であり、妖艶であり、蠱惑的である。

第37段には次のような当時の習慣があったという。最初に結ばれたふたりは、共寝をした後朝の別れの時、下紐を結び合って次に逢う時まで互いに解かなかった。こうした風習を踏まえた男女の贈答歌に漂う熾烈な恋情を夢二は正鶴を得た挿絵で表現している。女性は御簾を巻きあげた縁側に座り、男は簀子縁に片足をあげて腰を下ろしている。今まさに帰ろうとする狩衣姿の「昔男」が、尽きせぬ名残りをこめて歌い掛けている。それに答えている女性の顔貌、姿態からにじみ出る激しい慕情とともに返歌が口ずさまれる。こうした第37段の夢二の挿絵は、原典の小話が見劣りするほどの力作といえよう。特に、この段の男女の顔は無表情でありながら、それがかえって恋慕の情を湛えているのである。画面全体が近代的で、今までの吹抜屋台の手法をとっていない。とにかく、男女の姿を動的立体的に描くことに留意していたと思えるのである。

第95段の挿絵も強烈である。画面一杯に抱擁した男女の立姿が描かれている。しかもその描き方は夢二式美人画で、あまりにも背丈が高い男女の立像なのである。背景は白黒の

太い縦筋が描かれ「天の河」を象徴しているのである。しかも、男女の着衣が狩衣や袷を着ていながら、まるでドレスでも着ているかのようにエキゾチックに描かれている。わが国の古典の世界を、大正ロマンという点に立脚して描かれたこの作品の奇異に目を見張るのである。原典にある「彦星」、「天の河」を念頭に「関（物越し）」を取りはずしたふたりの喜びを動的に表現した逸品である。この作品は「新訳絵入伊勢物語」の中でも、小話を内面から適確にとらえた創意が認められる挿絵といえよう。

おわりに

大正ロマンと言われる叙情詩の作曲は、多く三拍子である。夢二の「宵待草」、吉井勇の「ゴンドラの唄」、野口雨情の「船頭小唄」などが代表的な三拍子の作曲である。デモクラシーが大きな社会思想の潮流となっていた時代、反官的な音楽がこうした三拍子のもつ哀感を醸成させたのであろうか。そのひとりが竹久夢二であった。彼は絵画において、従来の自然主義的な描写を打破した、きわめて印象的で叙情的な作品を発表した。このことは、今までに具体的に論述したつもりである。さらに夢二は、実に多くの詩を作っている。文学史の上からいえば、吉井勇、木下杢太郎、北原白秋などの詩人と比肩されるほどである。

さて、今回、竹久夢二と古典とのかかわりを「新訳絵入伊勢物語」の挿絵と「伊勢物語」の原典とを対照させながら考察してみた。現在は、文字文化と映像文化の競合が問われている。こういう点から、夢二と古典とのかかわりは「新訳絵入伊勢物語」だけでなく、夢二の「絵入歌集」「絵入歌集慕笛」などを研究してみる必要もあろう。なぜなら、これらの作品には、多くの古典から取材した夢二好みの和歌が載せられているからである。こうした古典からの作品と夢二が作った多くの自作の短歌とを見ると、彼の和歌の造詣の深さが理解できるのである。歌物語である「伊勢物語」の挿絵の作品は、夢二のこうした歌人としての才能に基因していることを忘れてはならないだろう。

参考文献

- 1) 『日本古典文学大系伊勢物語』大津有一、築島 裕、岩波書店 昭和32年。
- 2) 『伊勢物語の研究（研究篇・資料篇）』片桐洋一、明治書院 昭和43年。
- 3) 『校註伊勢物語』松尾 聡、永井和子、笠間書院 昭和46年。
- 4) 『伊勢物語と業平の世界』国文学24巻1号 秋山 虔、学燈社 昭和54年。
- 5) 『竹久夢二文学館（10巻）』萬田 務ほか、日本図書センター 平成4年。
- 6) 『現代美人画全集（竹久夢二）』木村重圭、集英社 昭和54年。
- 7) 『日本水彩画名作全集（竹久夢二）』小倉忠夫、第一法規出版 昭和59年。
- 8) 『日本の名画（竹久夢二）』長田幹雄、講談社 昭和47年。
- 9) 『近代日本の木版画』MOA美術館 昭和59年。
- 10) 『図説日本の古典（竹取物語・伊勢物語）』片桐洋一ほか、集英社 昭和53年。
- 11) 『古美術（江戸狩野・土佐派）』河野元昭、三彩新社 昭和59年。

Takehisa Yumeji and 「the Tale of Ise」

Kazunori YAMAOKA

*Faculty of College of Liberal Arts and Science,**Kurashiki University of Science and the Arts,**2640 Nishimoura, Tsurajima-cho,**Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan*

(Received September 30, 1995)

The Tale of Ise ranks with the Tale of Genji as one of the greatest Japanese classics. The Tale of Ise, which was written about one thousand years ago, has been read by so many people that it has a great influence on literature, painting, sculpture and handicraft in Japan. The Tale itself was presented in pictures by several artists. Those pictorial versions of the Tale have been greatly appreciated.

The new pictorial version of the Tale of Ise in present-day Japanese (Shinyakueiri Ise Monogatari) was published in 1917. The Tale was rewritten in present-day Japanese by Isamu Yoshii and the episodes of the Tale were presented by Yumeji Takehisa in five colorful wood-block prints and in sixteen beautiful paintings. These twenty-one pictures are so attractive to me that I have made them the subject of my study.

No less than sixty years have passed since Yumeji Takehisa died. His pictures have been growing more and more popular with years. I wanted to find the relation between his popularity and Japanese classics. I studied each of the above-mentioned twenty-one pictures and I understood how he managed to paint the Tale of Ise so successfully.